



「冬に学ぶ」



ちえこしょう どうてい

たかむらこうたろう

『智恵子抄』や『道程』などの詩集で知られる詩人・彫刻家高村光太郎は、「冬の詩人」と言われるほど、冬についての詩を多く残しています。その詩の特徴は、冬を避けたり、抒情の対象としないで、むしろ、冬に共感し、自分の生命力の源にしようとする積極的な姿勢だと思われます。たとえばある詩では、

冬よ、冬よ

踊れ、叫べ、僕の手を握れ

(『冬の季節』)

と言い、別の詩では、

冬よ

僕に來い、僕に來い

僕は冬の力、冬は僕の餌食だ

(『冬が来た』)

とさえ、言い切っています。いかに冬を自分の生きていく活力の源にしてきたか、その意気込みのすさまじさが、読む者に迫ってくるようです。

光太郎のこのような姿勢は珍しいと言えらると思ひます。冬は寒く厳しいもの、どこか人を内に閉じ込めてしまうもの、外へ出るのに億劫な季節……こんな常識を光太郎の詩は見事に覆してしまうのです。

みなさんにとって冬はどんな存在なんでしょうか。もしかすると、冬の持つ固定的なイメージに自分を慣らしてしまっているのではないのでしょうか。むしろ、冬の厳しい寒さの中に身を置くことで、それに立ち向かう意欲が起こってくるかもしれません。人は逆境の中で、自己の最高の実力を発揮できるのではないのでしょうか。

ぬくぬくと育った環境やあり余る恵まれた条件の中で、優れた芸術、学問が生まれたという例はあまり聞きません。

学問のさびしさに堪へ炭をつぐ

(山口誓子)

部屋の中にまでしみ通ってくる寒さの中で、わずかばかりの暖を取りながら、ひたすらに学問と向き合っている一人の学者の姿が浮かび上がってきます。

折しも12月、そして年が明けての1月、2月……みなさんの実力を試す時期がやってきます。それらに向けて十分な実力を養う季節こそ、冬はふさわしいのではないのでしょうか。高村光太郎の言うように、冬と手を握り、冬を自分の力として、勉強に励んでほしいと思ひます。